

暗唱聖句: 神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。

(エフェソ 3:19)

「パウロの名による書簡」とされる「エフェソの信徒への手紙」である本書は、使徒パウロ自身によって書かれたものなのか、あるいはパウロの弟子の手によるものなのか、もし弟子によって書かれたものとするならば、その時期はパウロの在世中か、死後かなどという真正さを巡った議論が続いています。

その議論のひとつに、本書には差出人と受取人（当時の読者）の具体的な状況記述がなく、あて先も不確かとされています。このような不確かさはこの文書に限ったことではありませんが、語彙や文体、思想などがパウロが実際書いたと言われている手紙とは違っているとも言われています。さらに本書は他のパウロの名による書簡と比較しても変異しており、コロサイ書との関係が近いとされていることも謎のひとつとされています。コロサイ書との関係については、後ほど記述いたします。

著者に関しては、主に二つの見解があります。パウロ自身の真正な手紙であるとする立場と、パウロ以外の著者がパウロの名を借りて書いたものとする立場です。まず、パウロの真正な手紙であるとする見解は、古代キリスト教の伝統でもパウロの手紙として読まれていたと思われる1世紀から2世紀にかけて、この手紙はアンティオキアからローマに至るまでの広範囲にわたって流布していたと考えられます。

18世紀以降になり、研究者たちによってエフェソ書の真正さが議論され始め、現代においてもパウロの手紙ではないという立場を取っている研究者がいます。語彙や語句の使用頻度の統計などによってパウロとは別人の手によって書かれたものと結論するならば、このような事実は他の手紙においても多く見出せることから、真正か非真正かについて結論づけることは難しいとされています。

「コロサイの信徒への手紙」との特別な関係についてみていきたいと思います。エフェソ書はコロサイ書と文学的・思想的特質において、「パウロ書簡」と言われているガラテヤ書とローマ書の類似以上に、字句の並行箇所や思想的近似関係が見い出せます。キリストが「体」（教会）の「頭」であること、霊的な諸力を超克し支配すること、キリストの血を仲介とした平和のテーマ、復活の把握の仕方などです。しかし、この二つの手紙が同時代の同一著者から派生したものか、あるいは、同時期の同一の資料を用いて編纂されたものなのか、時間的にどちらが先に書かれたものであるかという点でも議論は続いています。エフェソ書がコロサイ書に対してなんらかの依存があったとも仮定されています。この類似性については納得のいく結論には至っていません。書かれた場所については、あて先の問題と、パウロあるいはその協力者が、どこからこの手紙を書いたのかの問題と、関連しています。パウロの幽閉場所がどこであったのかについても、使徒パウロが牢に繋がれた場所は何箇所もあったとされていますので、エフェソ書がパウロが書いたものという見解を持つ人にとっては、その候補としてローマ、カイサリア、エフェソの三つの都市が挙げられています。

パウロの手紙の形式を踏んで、最初の挨拶は、差出人の名前、受取人への挨拶となっています。ここで注目したいのが、1章1節に「エフェソにいる」者たちが宛名となっていますが、この句の表記が無い写本があります。（新約聖書の本文を含む写本は、2015年8月現在で約5700件が知られています。現存する最古の写本のほとんどは、その用紙や書体から、2世紀半ば以降のものに見なされています。）

外的証拠の検討からは、より古い写本には「エフェソにいる」という句は本文に無かった可能性が高く、写字生による追記修正がされたと考えられています。内的証拠を考えると「より短い読みが優れている」という基準から、「エフェソにいる」という句が無い本文がより本来の形に近いと考えられます。

実際エフェソ書は、特定の教会宛てに送られた手紙というよりも、一般的な内容を諸教会に伝えるという性格を持っています。そうであるならば、もともと特定の宛名は無かったと考えるのが妥当となります。ただし蓋然性は低いですが、逆の考え方も可能で、もともと「エフェソにいる」があったが、内容的にどこにでも当てはまるものであったために特定の宛名が削除された、という考え方も成立するかもしれません。

「エフェソ書」は、「ガラテヤ書」や「ローマ書」のように論争の焦点となったことへの神の義と信仰のみによる救いが主題ではなく、おだやかでたおやいだ調和の教えを著者は書いています。これはエフェソに特定の問題や状況があったわけではなく、共同体に向けて愛情を示すという主題に基づいていると考えることができます。構成は、挨拶・頌栄・福音がもたらす恵み・キリストによって異邦人たちにもたらされた救い・信じる者に与えられる賜物はさまざまであっても共同体はひとつであること・日々の生活におけるすすめ・霊的な恵み・結びの言葉となっています。

今回の聖書箇所 3 章 14 節～21 節をみていきたいと思います。「パウロの祈りーキリストの愛を知る」という見出しから始まります。パウロの祈りは、神に対する畏敬の念を表すために、ひざまずいています。14 節の「こういうわけで」とは、3 章 1 節の「こういうわけで、あなたがた異邦人のために」との因果関係を示しています。パウロは「今まで、わたしが説明してきたように、あなたがた異邦人も神のみ心の奥義とその働きの具現であるキリストとその救いに組み入れられたから、まさに、こういうわけで、わたしは御父のみ前にひざまずいて祈るのである。」と言っているのでしょう。

神のみ心の奥義とは、神さまの壮大な秘められたご計画のことであり、コロサイ書 1 章 26 節～27 節の「世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかにされたのです。この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。」に書かれている通りです。そして、地上にある教会だけには留まらず、地上と天上の全ての人々のことを、すべての存在の源である神の包括的な父性に対して祈りを捧げています。

16 節～19 節の執り成しの祈りは容易に解明できるような文章構造ではないと言われていますが、この執り成しの祈りの内容を観る時、そこには宗教経験の段階的な深まりがうかがえます。まずは、内的に信仰が強められ、そこにキリストがいつも住まわれ、自らの愛と真実の行いを通して、更にキリストにあって奥義の廣大無辺を悟り、キリストの愛の溢れを知り、自らが、神の満ち溢れた愛の大海へと飲み込まれていくというものです。しかし、この愛は、キリストに根差した行為によってのみ深まるものであり、人間の側からの神との関わりは、「信じる」ということが重要な取るべき行動であると思われま

著者は、人と人との和と共同体間の一致はキリストの愛の表現であり、対立し合うイデオロギーを持つ人や共同体、異なった宗教や文化を背景に持つ人々もキリストのうちに一つに和合することを願っているのでしょう。そしてその原動力は知識ではなく、キリストの広く長く高く深い愛に根差した働きであると言えるでしょう。

前半の手紙の結びは、典礼的な頌栄の形式を用いて、ここでも主要な関心事である、キリストにおける力、働き、教会が挙げられ「アーメン」と結ばれています。

#### ●分かち合い

- ・日々のお祈りでお願いしていることはありますか？
- ・祈るということと、お願いとの違いはなんですか？



ショートメッセージは、教会ホームページから動画でも視聴できます。

右の QR コードを読み込むか、スマホ・PC からご覧の方は [こちら](#) をクリックしてください。

公開：7 月 14 日（木）～